

富士山の開山日

＜静岡県富士山世界遺産センター 学芸課 大高 康正 教授＞

今日6月1日は、かつて富士山の開山日とされていた日でした。といっても、かつて旧暦（太陰太陽暦）を使用していた明治5年（1872）以前の6月1日の話です。令和4年6月1日は旧暦では5月3日となり、旧暦の6月1日は令和4年の場合6月29日に相当しますので、実際はもう少し先の話ということになります。

さて、富士山には毎年夏季の登山シーズンの開始を告げる開山日が設定されています。この日以降、山小屋の宿泊やトイレの利用が可能となり、富士山頂への登山道も開放されます。例年、山梨県側では7月1日、静岡県側では7月10日を開山日とすることが続いており、この開山日には富士山麓の各登山口の浅間神社では開山祭が行われています。その年の富士登山の安全を祈願するものですが、静岡県側でも開山日の10日ではなく、1日に開山祭を行う地区もありますので、こういった事例から開山祭は古来より7月1日に伝統的に続けられてきたと思われる方も多いのではないのでしょうか。

実際には、開山祭は近代以降に行われるようになった行事で、開山日を7月1日とする考え方も古来の伝統という訳ではないのです。かつて旧暦を使用していた明治5年（1872）以前は開山日は6月1日とされ、少なくとも中世の室町時代の15世紀中頃には遡って確認することができます。近世の江戸時代に入ると、例えば山梨県の吉田口登山道に関する寛政2年（1790）の『富士日記』では、「六月朔日より山をひらきて、七月廿五・六日までにて」とありますし、文政8年（1825）の『隔搔録』にも「毎年六月朔日ヲ山開トシ、七月廿七日ヲ山仕舞トス」とあるように、6月1日を開山日とすることがいっそう明確になります。ただ、開山日に開山祭という神事や仏事が行われていたことは確認できません。

中世・近世の時代に生きた人々に、富士山の開山日を6月1日とする共通認識があったとしても、実際に富士山頂へ信仰登山を目指す場合、参拝者が山麓へと到着する日は6月1日よりも後になってきますので、開山日に開山祭をするという意識は生まれにくいのかも知れません。

江戸時代には19世紀以降、関東地方で角行系の富士講が流行しますが、講員の居住地に多数の浅間社が分祀され、富士塚が造成されます。富士山の開山日に各自の地元でも「御山開き」と称して、地元の「富士山」へ参拝しました。こうした行事は、現在の開山祭と共通する安全祈願という目的意識が含まれているように思います。

近代以降については新聞記事の情報が参考になります。明治時代はよくわかりませんが、大正時代には静岡県側と山梨県側で開山日は異なっており、静岡県側が早い年もあれば、山梨県側が早い年もありました。開山祭についても、昭和4年（1929）の「静岡新報」7月11日記事で、「明日富士山本宮で開山祭」とあるように、12日の実施を確認できます。ちなみにこの年は大雪の影響で山開きの時期が遅れており、実際にこの記事で開山祭を行った場所とは頂上奥宮でした。山頂郵便局などの施設の営業開始に関わって行われたものですが、開山日と開山祭が連動している状況を確認できます。またこの年は、富士山麓鉄道（富士急行線）が大月～富士吉田間の鉄道営業を開始した年でもありました。観光客への周知の便を図り、開山日を新暦7月1日に統一していったものと考えられます。

【参考】「富士山の開山日」（『富士山世界遺産センター公式ハンドブック』56・58頁）



富士山開山祭（村山浅間神社）